



## 諫早湾干拓事業と漁業権

諫早問題について情報をマスコミに頼っている私は、その情報量の少なさから大きな勘違いをしていた。水門を開くことに反対している漁民は純粹に水門を開くと外海（有明海）がより汚染されるのを心配しているのだと思っていた。だがそれはたんなる口実で実際にはこうゆう事ようだ。干拓事業による汚染で（国のいいかたを真似ると干拓工事と汚染との関係に科学的根拠はないということになる）地元の漁業者を支えてきた湾内におけるタイラギ漁が出来なくなり、工事を始めるときに貰ったであろう漁業保証金も無くなって干拓工事に生活の糧を求めるようになった。仕方の無いことだろう。彼らのことを朝日新聞では「漁業不振のため干拓工事で生計をたてざるを得ない諫早湾四漁協の『漁業者』たち」と、括弧つきの「漁業者」になっている。漁業がメインの仕事では無くなり多くの人々が干拓工事で生計をたてているのだ。たまに金を産むこともある漁業権なるものを持っているだけの「漁業者」なのだろう。

漁業権とはいかなるものであろうか。私が和歌山に住んでいる時（今も和歌山県民なのだが仕事を無くして住所不定の風来坊）漁業をする為にやっと網元さんに雇ってもらったと言う人と飲んだ事がある。私も生活出来ないのだから漁業をしてもいいはずだ。海は皆のものだし職業の自由があるはずだという彼は怒り出した。自分はこんなに苦労してやっと雇ってもらったのに他の人間が簡単に漁業を始められては困るというのである。漁業者には漁業者のシキタリがあって余所者は漁業をやってはいけないのだそうだ。そこには利権がある。だから漁業権なのだがそれは世襲によるもので、他の人間が職業として簡単には漁業を選択出来ない。漁場を守る為ならば法律で事たりるではないかという彼はますます怒りだした。法律など関係ないというのだ。彼らが守ろうとしているのは海でも漁場でもなく彼ら自身の生活であり利権（漁業権）なのだ。彼の話では海の上でも細かく縄張りが決まっていてそれを決めるのは個人や漁協の力関係（彼の話から類推すると多くの場合暴力）であるようだ。漁村は隣の町や村同士で利害関係からかなり仲が悪いようだ。漁業権は漁をしなくても利益を産む。たとえば関西空港を作るのに近隣の漁協には漁業補償ということでかなりのお金が入っているはずだ。生活の補償は当然のことで問題はない。問題は彼らが全ての人の共有財産であるはずの海を自分達の利益の為に勝手に売り飛ばす権利を持っているということだ。政府としても彼らに漁業権という名目で海の私物権を与えておくほうが何かと便利なのは説明するまでもないであろう。かくして私には失業生活を余儀無くされているにも関わらず漁業を自分で始めるという選択肢は無い。

話を諫早へ戻そう。第三者委員会なるものが3月27日（2001）に海苔の不作の原因究明の為（原因は分かっていると思うのだがお役人には科学的根拠が無いと分からないのだ。ここでまた無駄な時間と税金が使われる事になるのだが）干拓工事の凍結と潮受け堤防の水門を開放して調査をするよう提言をまとめた。これにより干拓工事従事者の生活は奪われる。漁業権ほどの力を持たない生活権は補償の対象にはならない。工事従事者の仕事がなくなっても多くの失業者がそうであるようにせいぜい失業保険があるくらいだろう。その工事従事者の多くに「漁業者」がいるということだ。海は汚れても仕方がないが、干拓工事がなくなると生活が出来なくなる。彼らの生活の補償をするには漁業権があるなしで区別は出来ない。工事従事者全ての人への補償が必要になる。諫早だけ特別に生活補償をする訳にはいかなくなる。全国津々浦々の同じような人たちに対しても同じく補償をしなくてはならなくなるだろう。私はそれでもいいと思うのだが。「漁業者」たちは海がいくら汚れようが干拓工事をやめる訳にはいかないのだ。漁業補償はすでに終わっているのだ。汚れた海に帰っても仕事にならず、他所の縄張りの海へ出張っていくことも出来ない。

漁協もまたしかり。水門の開放に反対しなければならない理由がある。有明海に面した四県の中で、地元の長崎県の魚連だけが干拓事業をめぐる再補償の協定を国と結んでいな

いというのだ。これはどうゆうことか。初めから漁業に多大な影響が出るのが分っていて、それだけ高額な漁業補償を受けたのではないのか。漁業権を売り飛ばしてしまったのだろう。漁業が出来なくなってもこれ以上の補償は求めないといえるだけの、当時の欲望の代価を受け取ってしまっているのだろう。悪魔との契約に手を染めてしまったのだ。だとしたら彼らは救われない。彼らに再補償をするということは漁業権で海を売り払い、その金を使ってしまった全ての人に再補償をしなければならなくなるだろう。心優しい私は、それでもいいと思うのだが。長崎県の魚連にとって水門は切り札なのだ。ほかの三県の魚連が水門を開けて有明海の再生を望んでいるのに対し、長崎県の魚連は、すでに無くしてしまった干潟や漁場が元に戻るのに長い時間が必要なのを知っている。「いま水門を開放すれば、ヘドロの流失などで漁場がある」と水門の開放に反対しているのだが、実は「その間の生活保障がないかぎり水門は開かせないぞ。海苔が採れなくてもいいのか。海がもっと汚れてもいいのか。それがいやなら再補償をしろ。」というものが本音なのだろう。生活がかかっている。彼らを責めることが出来るだろうか。全ての人々の共有財産である海を売り飛ばしてしまった彼らの代償ではあるのだが、買ったのは“私たちの国”だ。

戻る



maimai

あなたの愛車は今いくら? **Gulliver**

0120-22-1616

車種・年式

走行距離

今すぐ査定

ニュース [インリン様が小川らを伊東美咲、パソコンに](#)  
[進藤アナのデート現場](#)  
[“松坂世代”が挑むこ](#)

infoseek